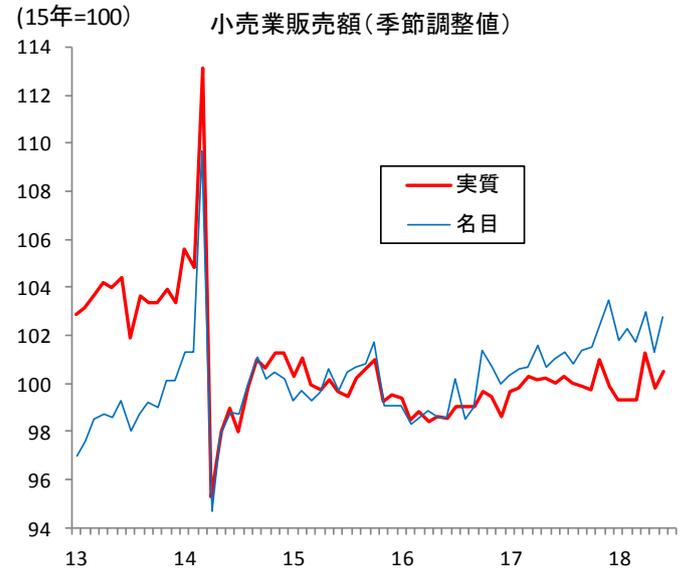
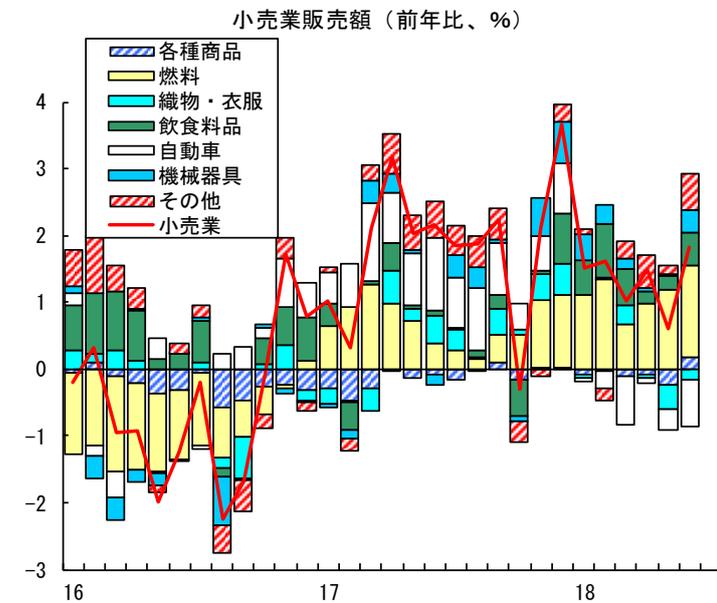


テーマ：小売業販売額（2018年6月）

～6月の消費は持ち直して4-6月期もプラスに。一方、7月は下振れの公算大～

発表日：2018年7月30日（月）

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL：03-5221-4528



○天候の回復から、6月の消費はリバウンド

経済産業省から公表された6月の小売業販売額は前年比+1.8%と、ほぼ市場予想（+1.7%）通りの結果となった。5月は前年比+0.6%と、それまでと比べて伸びが大きく鈍化していたが、6月は再び持ち直している。季節調整済み前月比でも+1.5%と、5月の落ち込み分（前月比▲1.7%）を概ね取り戻す格好になっており、良好な結果といって良いだろう。業種別（季節調整値）では、自動車小売業を除いて前月比プラスとなっており、特に百貨店等が含まれる各種商品小売業（前月比+3.5%）の増加幅が大きい。

また、価格変動の影響を考慮した実質値（実質化と季節調整は筆者）でみても前月比+0.7%（5月：▲1.5%）と増加している。名目値ではガソリン価格上昇の影響で押し上げられていた分、実質値では伸びは小さくなっているが、それでも前月からは持ち直している。業種別では、機械器具小売業（前月比▲0.2%）と燃料小売業（前月比▲0.2%）が微減となったが、その他は持ち直しており、名目値と同様に各種商品小売業（前月比+2.7%）と織物・衣服・身の回り品小売業（前月比+1.1%）の増加幅が大きい。

6月は東日本を中心として全国的に気温が高く、夏物衣料の販売が好調だったことに加え、早い梅雨明けに象徴されるように日照時間が多かったことが外出機会の増加をもたらしたものと思われる。5月は気温の低下と降水量の増加で消費は落ち込んでいたが、6月は逆に天候要因がプラスに効いたようだ。

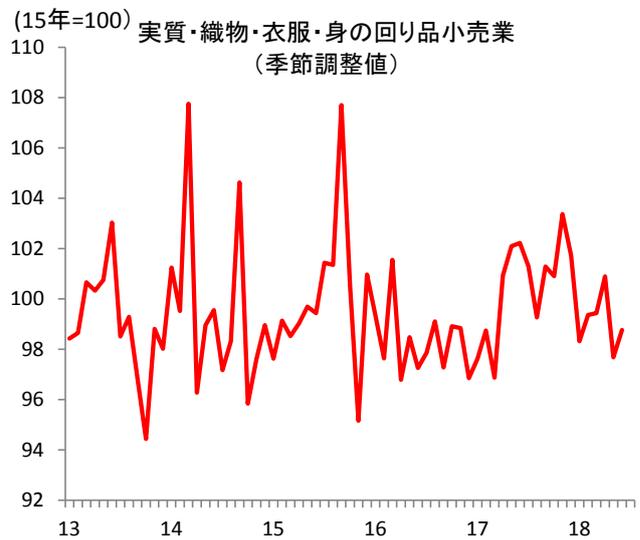
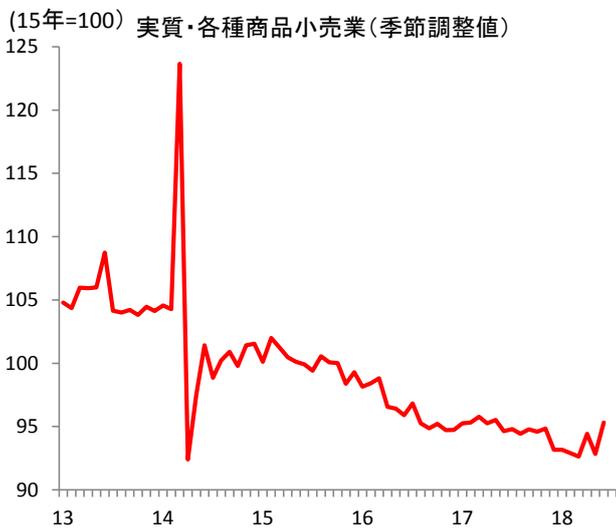
なお、小売業販売額の対象は財のみであり、サービス消費は含まれない。ただ、6月の日照時間の増加を踏まえると、サービス消費についても強い結果になる可能性が高そうだ。天候要因による押し上げと、弱かった5月の反動から、6月の個人消費は持ち直したと評価して良いだろう。

○4-6月期の消費は持ち直したが、7月は下振れの懸念も

この結果、4-6月期の名目小売販売額は前期比+0.4%となった（1-3月期：▲0.6%）。なお、名目金額でみると1-3月期は野菜価格高騰により押し上げ、4-6月は野菜価格の落ち着きにより押し下げられている点に注意が必要である。そうした価格変動の影響を考慮した実質値では、4-6月期は前期比+1.2%（1-3月期：▲0.9%）となる。実質でみると、1-3月期の落ち込み、4-6月期の持ち直しとも大きくなる形になる。4月の好調の後、5月が落ち込み、6月が持ち直すといった形で、天候要因により振れの大きい展開となったが、4-6月期を均してみれば1-3月期から回復がみられている。

1-3月期の個人消費については、大雪等の天候不順で外出が手控えられたことに加え、野菜価格の高騰で実質購買力が削がれたこともあって低調に推移していたが、4-6月期にはこうした下押し要因が解消されたことがプラスに寄与したと思われる。あくまで反動の域を出るものではなく、消費の基調が強いとは思わないが、とりあえず4-6月期の消費はいったん持ち直したとみて良いだろう。

一方、懸念されるのが7月の動向である。記録的な豪雨により消費も相応の悪影響を受けざるを得ないものとみられるほか、猛暑による消費抑制の可能性もあるだろう。一般に、猛暑は消費を刺激すると言われることが多いが、暑過ぎる夏が外出の手控えに繋がる結果、サービス消費を中心として消費を減退させる可能性も意識しておく必要がある。7月の消費は下振れる可能性が高いだろう。



(出所) 経済産業省「商業動態統計」

(注) 実質化及び実質値の季節調整は第一生命経済研究所